

編 集 後 記

今回の本誌はリハビリテーションの分野でこの10年間にどのようなことがあったかという問題を取り上げた特集である。水野祥太郎先生をはじめ土屋、五味、柴田、大塚、遠藤、原田、本田、青木、角田、萩島そして土屋氏と各界の専門家が10年間このリハビリテーションという本邦では比較的地味な、しかし必須の分野に、情熱を傾けて来られた苦心のあとがしのばれる、尊い論説集である。水野先生が市ヶ谷河田町の辺りを歩いて傷痍軍人職業補導所へ行かれていた頃をこの文面から察する限り現在の女子医大界わいは非常に変わった。義肢の製作技術の進歩に生体力学などの学問的解説が加ってこれ一つをみても大変進歩したかに見える。しかしながら障害のある人々を救い、より速やかに社会復帰をさせることを願って、彼等のために働いて来た幾多の誠意ある人々の哲学とか心とかいうものはまったく変る筈がないということであらためて深く感じた。横文字が導入され翻訳されるいは本邦での消化作用が不完全で昨今のリハビリテ

ーション医学そのものも多少混乱しているのではないかという不安はこれら諸氏の文章を読んで杞憂に過ぎないことがわかった。

独自の健全な方向へ本邦のリハビリテーションは動きつつあることは明かである。とはいっても萩島氏の強調されているごとく先進国のリハビリテーションの動向もまた一段と高い目的へ向って進んでいる。制度とか総括とかいうことは欧米民族の持つ独特の長所かもしれない。良いことは偏見を捨てて良いこととして素直に導入し学ぶべきである。そして一方高木先生の思想は今日の社会でも正しく、より拡大されて理解されるべきである。

紙数の関係で肢体不自由児教育の歩み、PT 学会 OT 学会の歩み、リハビリテーション医学研究面からの追跡あるいは医師教育の歩みなどについてはその重要性にも拘らず述べられなかったが、将来必ず取り上げられるべきであろう編集子の一人として期待もするものである。
(大井 淑雄)

次 号 予 告 (1 卷 6 号)

特 集 対麻痺のリハビリテーション I

脊髄損傷急性期の処置	九州労災病院	赤 津 隆
対麻痺における痙性と脊髄切除術	大阪労災病院	川 田 平
脊髄損傷患者の骨・関節・筋系の変化	関東労災病院	高 橋 定 雄・他
脊髄損傷性対麻痺患者における性機能障害	東北大	矢 戸 仙 太 郎・他
完全横断脊髄修復の試み—われわれの実験の紹介—	東北大	鈴 木 二 郎・他

講 座 筋収縮のメカニズム (1)

—歴史的概観と現状について—	自治医大	大 井 淑 雄
医学的リハビリテーション施設の計画 (4)	東京都老人総合研究所	陳 慧 玉
リハビリテーションと社会福祉 (5)		
—補装具の申請と交付—	湯河原厚生年金病院	上 原 美 智 子

一 頁 講 座	障害者のための町づくり (1)	日大工学部	佐 藤 平
ひ と	菅原正信先生	宮城拓桃園	高 橋 孝 文
セ ミ ナ ー	ライト博士を囲む教育・研究セミナー (3)	ウイスコンシン大学	G.N. ライト・他